

病防第86号
平成27年9月15日

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察特殊報について（送付）
このことについて、発生予察特殊報第1号を発表しましたので送付します。

特 殊 報

平成27年度発生予察特殊報第1号

平成27年9月15日
熊本県病虫害防除所長

- 1 病虫害名 トルコギキョウえそ輪紋病
- 2 病原ウイルス アイリスイエロースポットウイルス
(*Iris yellow spot virus*, IYSV)
- 3 発生作物 トルコギキョウ（リンドウ科）
- 4 発生確認の経過
平成27年8月、施設栽培のトルコギキョウで、葉にえそ斑点が生じる被害を確認した。当所においてRIPA法およびRT-PCR法によるウイルス検定を行った結果、*Iris yellow spot virus* (IYSV) が検出され、トルコギキョウえそ輪紋病と確認された。本ウイルスによる病害の発生は、県内では初めてである。
- 5 国内の発生状況
本ウイルスによる病害は、平成8年に千葉県のアルストロメリアで初めて確認され、トルコギキョウでの特殊報は平成13年に佐賀県が初めて発表している。国内では、他にネギ、タマネギ、ニラ、ラッキョウ等で報告されている。九州での本ウイルスの発生は、大分県、福岡県、宮崎県、長崎県でも確認されている。
- 6 病徴
今回確認されたトルコギキョウでの病徴は、葉のえそ斑点であった（図1）。本ウイルスの感染により、葉の黄化、えそ輪紋、茎のえそ条斑、株の萎縮等を生じるが、品種や生育段階によって病徴が異なる。
- 7 病原ウイルスの特徴
 - 1) TSWVやCSNVと同じトスポウイルス属のウイルスでネギアザミウマ（図2）が媒介する。本虫の成虫・幼虫はともに罹病植物を吸汁することで本ウイルスを獲得し、死ぬまで媒介することができる（永続伝搬）。なお、保毒成虫から卵を通じた次世代への伝搬（経卵伝染）はしない。
 - 2) 種子伝染や土壌伝染はしない。また、汁液伝染はほとんどしないため、管理作業により広がる可能性は極めて低い。
 - 3) 本ウイルスは、多くの植物に感染することが確認されている（表1）。

8 防除対策

- 1) 発病株は抜き取り、土中に埋設するなど適切に処分する。
- 2) 媒介虫であるネギアザミウマの防除を徹底する。
- 3) ネギアザミウマは野菜類や花き類、雑草等に広く寄生する。ほ場周辺の雑草は、本虫の発生源、越冬源となるので除草を徹底する。
- 4) 青色の粘着トラップを設置し、ネギアザミウマの発生時期、発生量の把握に努める。
- 5) 施設内へのネギアザミウマの侵入を防止するため、開口部に防虫ネットを設置する。防虫ネットは、目合いが1mm以下であれば目合いが小さいほどより侵入を抑制する。しかし、施設内の温度が高温になりやすくなるため、設置する際は作型等を考慮する。設置後に隙間や破損があると侵入抑制効果が低下するため定期的に点検する。
- 6) 収穫終了後には、施設を密閉し、ウイルスを保毒した虫の野外への拡散を防ぐ。

表1 IYSVの感染が確認されている主な植物

科名	植物名
アルストロメリア科	アルストロメリア
リンドウ科	トルコギキョウ
ユリ科	ネギ、タマネギ、ニラ、ラッキョウ、ニンニク、テッポウユリ、リーキ
ヒガンバナ科	ユーチャリス、アマリリス、スイセン
スミレ科	パンジー
アカザ科	ハウレンソウ
アブラナ科	ダイコン、ハクサイ、ブロッコリー、ミズナ、イヌガラシ、スカシタゴボウ、タネツケバナ、ナズナ
セリ科	ニンジン
カタバミ科	カタバミ
キク科	チチコグサモドキ、ノボロギク
ゴマノハグサ科	オオイヌノフグリ、トキワハゼ
シソ科	ホトケノザ
スベリヒユ科	スベリヒユ
ナデシコ科	コハコベ、オランダミミナグサ、ノミノフスマ



図1 葉のえそ斑点症状



図2 ネギアザミウマ成虫

問い合わせ先

熊本県病害虫防除所

〔 農業研究センター 生産環境研究所 〕
〔 病害虫研究室 予察指導係 〕

担当：児玉、荒木 TEL：096-248-6490